



小島烏水全集

第十四卷

大修館書店

小島烏水全集 第十四卷 (第十三回配本)

定價八八〇〇圓

昭和六十一年八月二十日印刷
昭和六十一年九月一日發行

著者 小島烏水

發行者 鈴木敏夫

印刷者 山田 隆

發行所 株式會社 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三一二四

電話〇三(二九四)三三二一(代表)

〒一〇一振替(東京)九一四〇五〇四

ISBN 4-469-19094-2

ISBN 4-469-19080-2

(全15卷)

第十四卷 目次

江戸末期の浮世繪

序に代へて

江戸末期の浮世繪（總説）

葛飾北齋の「富嶽三十六景」 附『富嶽百景』

一 大北齋の出現

二 「富嶽三十六景」の美術史上に於ける位置 附 北齋とタアナアの比較

三 「富嶽三十六景」を生んだ時代

四 北齋藝術進展の徑路

五 「富嶽三十六景」以前の富士山の繪畫

六 製作年代考

七 「富嶽三十六景」の目次

八 「富嶽三十六景」の構成と描寫

九 『富嶽百景』 附 「北齋道中畫譜」

六

初代廣重の風景畫に於ける寫生と日記

六

一 錦繪「木曾街道六十九次」

六

上 風景畫の時代 中 北齋と廣重 下 木曾街道

二 廣重の甲州日記に就て 附 木曾街道の寫生帳

二七

一 甲州寫生帖 二 後半の日記

三 江戸名所の寫生畫稿

三〇

二代歌川豐國

三三

一 二代目豐國は國重か豐重か 附 先師の寡婦と密通説の冤を雪ぐ

三九

二 二代豐國の畫技は拙なるか

四四

菊川英山

五〇

溪齋英泉傳校註

五一

『續浮世繪類考』の英泉略傳は自敘傳なるの辯

五一

一 雅號畫名

五六

二 生ひ立ち

五八

三 英山と英泉の關係

六四

四 好色本	一六
五 北齋の感化	一六
六 美人風俗畫	一六
七 人情本及挿繪	一七
八 醉 態	一七
九 行狀記	一七
十 英泉の住居及肖像	一七
國芳の二十四孝——西洋畫の影響を受けた浮世繪の人物版畫	一八
三代豐國と默阿彌と五代目菊五郎	一九
豐原國周評傳——寫樂以來の第一人	二〇
大首繪	二〇
役者繪	二九
美人繪	三六
性 行——初期の記錄	三〇
性 行——中期と晩年の記錄	三九
圖版解説	四六

三世歌川豊國大首役者繪集

附 歌川芳虎大首似顔繪集

序

解 說

第一章 三世豊國

第二章 似顔大首繪考

第三章 三世豊國大首繪の前後

第四章 三世豊國大首繪解説

枚數 版元と彫師 製作年月 未刊の校合摺 摺刷 描かれた役者 附表

第五章 三世豊國大首繪の美術價值

第六章 歌川芳虎の大首似顔繪

圖版目次

二六

二五

二五

二七

二六

二九

三三

三七

三六

小島烏水翁菟集浮世繪目錄

序

浮世繪目錄

三三
三二

美術隨想

廣重初期時代の作品

三七

曲亭馬琴と歌川廣重の關係

三五〇

歌川廣重の旅

三六三

浮世繪師の研究を大家以外に延長の議

三七〇

天童藩内の廣重肉筆

三七五

高橋おでんに關する三代廣重の手紙

三八七

掘出し物

三八八

アンケート回答

三九二

浮世繪界への希望

三九三

浮世繪研究資料

三九六

浮世繪研究史上に於ける坪内先生の位置

四〇七

小林文七翁愛藏の北齋全身畫像

四一三

二代豊國襲名事情

四一八

好事家大曲駒村

四二五

富士の畫家三人

四二九

『富嶽百景』解説

四三三

作品解説

四五〇

裏富士 正月初湯之圖 新製錦手猪口 潜戸

*

『藏書票の話』序

四五三

『浮世繪
版畫』 婦人化粧美傑作圖錄』序

四五四

『廣重江戸風景版画集』序

四六〇

『浮世繪類考』序

四六三

*

エツチング講話

四六九

コロのエツチングに就いて

四七四

湖畔の舟 牛とバツテイラ 伊太利記念 砂丘の杜

ヴィナスと娘 フロレンチンのドーム

作品解説

四七九

十字架上の基督 寒村晩歸 セルビア兵 勞作へ行く農夫たち

暴風雨 エツチング製作中のマチス自畫像 落穂拾ひ

ギョーマンの肖像 女 盆を持てる小兒 マンドリンを持つ女

料理人の群れ

口上言ひ

四八九

ミレーの創作版畫

四九〇

乳酪を作る女 手車を推す農夫 鋤を打ち込む農夫

羊毛を剪るをんな

解題・解説

近藤 信行 四九五

江戸末期の浮世繪

序に代へて

著 者

序に代へて、浮世繪のおもひ出話をしるす。

少年時代、横濱に人と爲つて、老松學校に通つた。同級の生徒に、得二さんといふ少年と、級は違つたが、牛麿さんといふお友達があつた、此二人は、當時、野毛大聖院下の、縣廳の官舎に住まつてゐた、牛麿さんが、芳年の錦繪を、大分持つてゐるので、得二さんと私とが、いつも入りびたつて見せてもらつた、月百姿のよかつたことも忘られないが、殊に浦島太郎が大龜に乗つて、海に泛んでゐる二枚續きの美しさに見惚れて、三人の少年鑑賞家は、芳年が繪かきで一番えらいことに、一致した。

得二さんは、少年でありながら、文章がうまかつた、口が吃るので、筆の方が發達したのかも知れぬが、むづかしい漢字を、驅使することが自在で、子供心にも、これには、まるつてゐた、得二さんの宅へ遊びに行くと、お父さんの書齋から、『新編相模國風土記稿』といふ厚ぼつたい本を數冊を持ち出して見せてくれた、その本の銅版らしい挿畫と地圖とは、歴史地理の興味を、そゝらずには置かなかつた、山川漂泊の運命は、得二さんと私の胸に宿つたかの如くに見えた、貧乏人に生れた私は、どんなにか、牛麿さんの芳年が羨まし

かつたか、又得二さんの家に、『相模國風土記』のやうな立派な本のあることが嫉ねたましかつたらう、假に今の私が、寫樂の雲母摺きらくずりを持ち得たとしても、又沙翁の初版本が手に入つたとしても、恐らく芳年に感心したり、『風土記』が欲しかつたほどに純真に心を動かされないであらう、おかげで私は、繪紙あがみ（浮世繪などいふ名稱を知らなかつた）が大好きになり、一つは身體も虛弱なところから、務めて遠足をするやうになつた、それには醫師の勧めもあつたが、『風土記』の誘惑もあつた。

小兒は大人の父なり、といふ格言の意味が、何であるにもせよ、今の六十老に近い私が、錦繪いぢりの止められないのも、芳年好きの少年の延長でなかつたとは、言はれない、錦繪に夢中になつて、没我の境地に身を置いたところから言へば、往年の小兒の方が、遙かに父であつた氣がする。

それから春雨秋霜十幾年、得二さんは高等學校に入學して、マアコレイの『クライヴ傳』が讀めるやうになり、帝國大學に進んで、漢文學を專攻されるやうになつたが、私は家計上の都合で、前垂れ掛けの小商人に仕立てられるために、手近の商法學校に入學したり、商館の小僧になつたりした、併し休日には、得二さんと一緒に、仲よく旅行をすることは出來た、後に登山を始めたのも、その一變形ですらあつた、牛麿さんとは、その後一切御無沙汰をしてしまつたが、先年新聞を見ると、寫眞入りで、北海道長官、澤田牛麿の名が出てゐた、幼な顔に似てゐるから、やはり同君であらう、得二さんとは、今でも年賀狀の交換を缺かさずやつてゐる、臺北大學の教授、文學博士久保天隨といった方が、通りがいに、出世した友達を持つと文章を書いても、興味何十パーセントぐらゐるものがあるから、ありがたい。

話元に戻る、横濱の馬車道には、兩側に夜店が並んでゐた、座を敷いて、カンテラを燈して、古本屋もあれば、繪艸紙も賣つてゐた、「文學少年」になりかけた私は兎屋出版の仇討本や、御家騒動の小説を買つたが、浮世繪（もうさういふ名稱をおぼえてゐた）は、始めて英山の美人繪を、一枚求めた、それは一番奇麗で、安かつたためであるが、不思議にも、その一枚が、今日まで手許に残つてゐる、思へば英山は、私の浮世繪蒐集に於ける手ほどきであつた、私が一昨年、彰美會で、松木喜八郎氏と共に、英山の個人展覽會を開き、本巻（『江戸末期の浮世繪』）に、その小傳を立てたりしたのも、さうした縁故から、一個無縁佛に對する、微力なる施主の心持に外ならない。

その頃の夜見世で、茶壺の小印のある役者繪（細繪）を、一枚見たが、繪師の落款が、無いので、誰の作とも知れず、夜店の主人自身にも解らず、買ひたくもあり、小使錢は惜しかつたので、一日延ばしになつてゐたところ、夜店の主人が、或夜、薄笑ひを洩らして『新增補浮世繪類考』といふ本を披いて、こゝを御覽と見せつけられたのを拾ひ讀みをする、茶壺の印形は、勝川春章であつた、無論、繪は、しまひこまれて、二度とふたゝび、私の手の届かないものになつてしまつた、果然、釣り遁がした魚は大きかつた。

その後、青年時代の私は、浮世繪などを忘れてしまつて、登山旅行に熱中した、當時、横濱山手にウェストンといふ宣教師が住んでゐて、『日本アルプス』といふ著書があるほどの、日本山岳早期時代の探検者であつた、私は山のことで、岡野金次郎氏といふ友達と共に、ウェストンの住宅を始めて訪問したとき、應接間で見た錦繪は、北齋の「富嶽三十六景」東海道程ヶ谷の一枚であつた、私は北齋の繪が、いゝものである

といふことを、沁みぐくと味はつたのは、この時からであつた、今茲に本巻を公けにするに當つて、程ヶ谷を原色版として、巻頭に挿入したのも、當時の印象が鮮やかに残つてゐるからである、そして平生書きたいと思つてゐた北齋の「富嶽三十六景」の考證と評論を、本巻に依つて、發表することが出来たのを悦ぶ。

その登山旅行から、私は水彩畫家の大下藤次郎氏、丸山晚霞氏等と、懇意になつた、大下氏が物故せられた一周忌に、お宅に伺つて、計らずも同席の一知己を得た、それが今の尙美社主人、松木喜八郎氏であつた、浮世繪では、廣重が一番好きになつてゐた時分だから、松木氏に廣重研究の本は、無いかと聞いたら、ありますから、孰れ送つてあげませうと言はれた、間もなく京都の松木氏宅から、送られたのが、紙表紙大形本の英書で、それが有名なハツバア氏の、廣重の賣立目錄であつた、そのハツバアといふ米國人は、偶然にも、前記の岡野金次郎氏が、勤め先のスタンダード石油會社の支配人であつたことを、後で知つた、それから私は、同書を唯一の参考本とも、教科書とも頼み、兀々と廣重の研究を始め、松木氏にも、時折手紙で教示を乞ひながら、やつと書き上げたのが『浮世繪と風景畫』（大正四年版）なる一書であつた、その頃は、もう銀行に勤めて、いくらか小使錢も出来たから、研究資料として、廣重の安繪を、多く買ひ集めたのが、主として神田淡路町の酒井好古堂であつたところから、同堂主人と相知つて、雜誌「浮世繪」（大正四年六月初號發兌）を刊行することになり、編輯は齋藤扇松堂が助けてくれたが、寄稿家のうちには、横濱在住の高畠和雄君と、特に親しかつた、三代豊國全盛時代に、二代豊國が、酷ツびどく取扱はれて、甚だしきは、先師なる初代豊國の未亡人に入夫したやうに、流説されて、それが從來の浮世繪史家から、殆んど事實として、

受け入れられてゐることに對して、私が雪冤せつあんの辯を公けにしたのも、同誌での發表が初めてであつた、扇松堂は、その頃、御成街道の松富町に「元祖一枚摺屋」の看板を掛けて、所謂一枚摺あきなを商つてゐたが、餘暇を偷ぬすんでは、三代豊國や英泉や、國周の墓に詣で「浮世繪師掃墓錄」を書かれたが、それが大震災以前だけに、今日となつては、唯一の詳しい文獻になつた、私の本巻にも、多く引用してある。

高畠和雄君は、廣重の遺稿「東海道餘興」を發見入手せられて、好古堂から上梓せられ、三代豊國の大首繪に就いても、未發の資料を公表せられた、私は『三代豊國役者大首繪集』（昭和五年刊）を編述刊行するに當つて、同君の研究資料が、土臺になつたことを、告白する義務を感じる、惜しい哉、私の渡米中、扇松堂は病歿し、高畠君は大震災で壓死せられ、貴重なる浮世繪の蒐集品は、擧げて一炬に附せられた、吁。

私は又、廣重研究が縁になつて、小林文七氏の招致に與かり、隅田川に臨んだ駒形町の同家で、同氏愛藏の北齋と廣重の肉筆を取り替へ引き替へ、堪能たんのうするほど數日に亙つて見せていたが、廣重自筆の旅行記「甲州日記」を披閱して、他日の備忘までに、要點をノート・ブックに記録して置いたが、小林氏も、今は亡き人となられ、愛藏品が、慘いたましくも悉ことごとくく大震災で灰燼となつたので、憶ひ出のために、當時のノート・ブックを基として書いたのが、本巻に收めた「廣重の甲州日記に就て」なる一文である。

浮世繪のおもひ出話が、どうやら亡友帖になりかけたが、是等の今人故人なくして、恐らく本巻は生れなかつたのである。